

近世日本の医学にみる「学び」の展開

町 泉寿郎

一 中世末期～近世初期における初級医薬知識の学び

毛利家臣の玉木吉保（一五五二～一六三三）が著した自伝『身自鏡』^①（一六一七成）には、一三～一五歳の三年間に真言宗の勝樂寺に入って同人が学んだ内容が記されていて、一六世紀後半における少年時の「読み」「書き」の内容として、従来から注目されている。一三歳の初年時には、『庭訓往来』『童子教』『実語教』など往来物の読書と併せて、『心経』『観音経』といった短い仏典がテキストとされている^②。往来物の文体は、中国人による正格漢文ではなく、その語彙はあくまで日本語であり、部分的に統語法を中国式にした和文である。その表記も殆どの場合、和様の行草体漢字と添仮名によって書かれ、楷書体で書かれることは稀である。仏典は多くの場合、楷書体漢字の正格漢文で書かれている。したがって、往来物と仏典とは、難易度に関きがあることに注意したい。ここから読み取れる初年時の学習内容としては、記憶力旺盛な少年期における毎朝の読誦によって、仏典テキストによって漢字音を聴覚記憶すること。そして、往来物の文体と表記を修得することによって、日常的な書記言語を習得することであったと考えられる。

玉木吉保の学習履歴は、この三年間の和漢書による初学のあと、連歌や易学の他に相当の医学知識を身につけ、連歌の名

を自咲、易学の名を是空、医者としては偽真と名乗った。一八歳（一五六九）の年に連歌を学び、里村紹巴（一五二五～一六〇二）による和歌形式で詠まれた連歌論「歌式目」全二三五首を書留めている。二〇歳（一五七一）の年には茶の湯や馳走に招かれる機会が多く、料理に関する知識を身につける必要を感じ、四季の食材をその調理法や「ツマ」と共に書付けていて、この部分は食に関する「重宝記」と見なしうる記述になっている。中国地方各地での転戦が続いた後（二二～二五歳）、二六歳で帰国した際、某人が語る「合禁」（食物の食べ合わせ）を読み込んだ和歌を聴いて一五首を書留めている。易学は四八歳（一五九九）の年に大坂で儒者は三に就いて学び、翌年は大坂で茶の湯を習い、五〇歳（一六〇一）の年に大坂で生薬と脈診について学んだ。医学の師承は記されていないので不明だが、その医学知識は韻文によって記され、生薬名とその性質・効能を読み込んだ「歌薬性」八〇首、続いて七表の陽脈を詠んだ七首・八裏の陰脈を詠んだ八首・九道脈を詠んだ九首・死脈を詠んだ一八首を合わせて「歌脈書」四二首からなる。更に、五九歳（一六一〇）の年には、心気佐旁翁という擬人化した病氣と藪偽介白翁という自分自身に擬した医者が合戦して、各種の病に打ち勝つ薬方を記した戯作「医文車輪書」を作っている。

玉木吉保の修学過程から、彼が韻文（五七七七の三二文字）によって多くの医薬知識を記録していることが指摘できる。諳誦の便を図って韻文化した医書のルーツをたどれば、中国では歌括・賦が古くから用いられていて、南宋・崔嘉言『脈訣』や元・李杲『薬性賦』といった単刊本のほか、明代医学類書にはしばしば見られ、日本で広く読まれた『万病回春』『医学入門』³にも薬性歌・用薬賦が収録されているし、鍼灸書『鍼灸聚英』『鍼灸大全』などでは、経絡・経穴とその主治を詠み込んだ歌賦が大きな要素をしめる。しかしながら、漢籍を訓読によって理解した日本では歌賦は諳誦の役に立たなかった。この缺を補うために、自国の定型詩を借りた医薬知識の韻文化が始まったと見られる。伝統的な「雅文芸」としての和歌ではなく、「連歌」が知識の習得・記憶に役立つ日用的な修辭技法として機能していることが分かる。しかも「合禁」歌の末尾には、「是は料理にも入で不叶事也。亦薬服にも入事也」とあることから分かるように、四季の食材と調理

法、食べ合わせ、薬性は、それぞれが相互に連関する知識であったことが理解できる。

近世期を通じて、和歌の体裁を用いて医学知識を普及定着させようとした著作は少なくない。内容的に言えば、養生・食養関連が多く、脈診に関するものがこれに次ぐと見られる⁴。著作の意図としては、記憶しやすい韻文によって読者各自が健康管理することを期待された啓蒙的な著作が多い。例えば曲直瀬道三（一五〇七～一五九四）は複数の韻文による医書を残しており、そのうちのいくつかが現存する。『養生和歌』（一五八八成 尊経閣文庫所蔵）は食欲・色欲の抑制とその他生活習慣上の注意事項を一七首の少ない歌数に凝縮し、『養生之誹諧』（一二〇首 一五八八成 毛利博物館所蔵）は序跋歌・太乙真人七養の図解・入浴法・食養生、および婦人・小児・口齒・眼疾・痘の諸科の病氣予防と発症後の対処法を備え、この種の医書として充実した内容を持つ⁵。なお、旋律に載せて記憶しやすい形式をとった医書としては、『十四経久世舞』（一六八〇刊）・『十四経絡謡』（『謡曲十四経』とも）・『謡曲経絡書』など⁶、体内を巡る十四経絡（手足の三陰三陽と任脈・督脈）の名称に、謡曲に準ずる節を施した本が複数出版されている。これは鍼灸治療従事者向けのものと考えてよいだろう。

専門医師から非専門家への医学知識の授受がはつきりしている例としては、曲直瀬道三と戦国大名の間での養生書の授受例は恰好である。道三は次節に説くように一六世紀後半の日本の医学界における高水準の学知と治術を備え、著名な戦国武将や天皇・公家に対する医療活動を行い、彼らの求めに応じて著した医書も少なからず伝存している。著名な例としては、一五六六年（道三六〇歳）に出雲の尼子義久を攻めて陣中に病んだ毛利元就（一四九七～一五七二）が京都から道三を招聘した時のことがあげられる。一二月に道三はその陣中で『雲陣夜話』を著した。随従している門弟のために説かれた前三ヶ条（旧暦一二月一～七日）と、元就の侍医委庵乗順の求めに応じて書かれた後四五ヶ条（旧暦一二月二三日）からなり、主として明代医書から引用して病症ごとに診断・要訣・治方を漢文体で簡略に記した専門的な医書である。これに対して翌一五六七年に毛利元就が上洛した際、その求めに応じて『九規』（『今大路家記鈔』⁷所収）を進言した。その九ヶ条は一…怠勤之弁、二…飲食居所之儉約、三…歌舞之用捨、四…威徳且兼行、五…兵戦莫好莫忘、六…貴兼聴嫌偏信、七…勉強

懈奢之異、八…親賢智遠宝飾、九…豫養生豫防乱からなり、ほぼ日常的な心がけに終始し、文体は記録体であり、引用文献は医書以外の儒書・史書から要語を掲出することが多い。

『九規』第九に説くように、養生書において房事は言行・飲食とともに重要な要素であるが、同じ一五六七年秋には、道三は大和国多聞城において松永久秀（一五一〇～一五七七）の懇望によって「養生」一冊と仮名書きの房中養生書「素女論」一卷を講授している。松永久秀の要求に応じて、一般的な養生書とともに房事に特化した養生書が作成されたと思える。「養生」の内容は未詳であるが、仮名書きの「素女論」は今日一般に『黄素妙論』⁸として知られているものと考えられ、一人の男性が多数の女性を相手に円満で快適な性生活を営むための具体的で実用的な性医学書になっている。その跋文に述べるように、本書は明代刊行の『素女妙論』⁹（一五三六刊）を基にして漢字平仮名混じりの平易で暢達な文章で日本語訳したものであり、道三が松永久秀からの需要に応じたものと考えても内容的に矛盾しない。明の原刊本と道三の和訳本の間の時間的な隔たり約三〇年間は、必ずしも短期間とは言えないが、道三が明刊本に接した時期が更に遡ることは確実であるから、この三〇年は新刊の医学知識を日本の最先端の医者が摂取するのに要した時間ではなく、日本の最先端の医者が中国の最新医学情報をもとに大和言葉に翻訳し、それを日本の非専門的な読者が摂取するまでに要した時間と考えるべきである。

二 中世末期の専門的な医学知識の「学び」——曲直瀬道三を例として

曲直瀬道三は、和氣家・丹波家などの由緒ある医家の出身ではなく、自らの研鑽によって医名を得た人物である。道三が自らの伝記と医学の経歴を記した『当流医学之源委』¹⁰は、彼が自己の医学を「当流医学」と自称し、中国古代から自分に到るその医学の「道統」を強く意識していたことを示す。近世医学を準備した名医道三の修学過程と、道三が構築した「当流

「医学」の修学過程を見ておこう。

道三自身が三九歳で帰京して京都に開業するまでの修学は次のように行われた。

和暦	西暦	月	日	年齢	記事
永正一一	(一五一四)	七	七	八	近江国守山の太光寺に入る。心経・楞嚴咒・法華経を習う。
永正一六	(一五一九)	八	一五	一三	相国寺の蔵集軒(巢松軒)に入り、剃髪して商英等皓と称す。三体詩・黄山谷を読み、蘇東坡の筆法を習う。
大永 八	(一五二八)	五	五	二二	関東遊学に発ち、足利学校の日新学寮に入り、庠主文伯に従学。同学に文仲あり。
享祿 四	(一五三二)	二五	一一	二五	柳津に初めて導道に会い、『素問』を習い、『玉機微義』を読み、『用藥百二十種之功能』を授かる。
天文 五	(一五三六)	二	二六	三〇	田代三喜より『当流医道之奥義(唯授一人之六通)』を授かる。
天文 五	(一五三六)	二		三〇	江春庵周琳―猿渡正安―導道と相伝した『雞旦祝酒之三葉』を書写する。
天文二四	(一五四五)	四	一九	三九	佐野東根庵より下総を経て、小田原早雲寺に到り、北条氏に請うて長渡呂から海路、大湊に着岸し、途中、大神宮に参詣し、帰京。

八歳の時の修学内容が仏典の読誦であることは、一三歳の玉木吉保の場合と揆を一にする。一三歳の時には相国寺の支院に入って正式に僧侶となり、『三体詩』や黄山谷の詩文を読み習い、蘇東坡の書法を学んだ。この段階は、既に一三〜一五歳の玉木吉保の修学内容を超えて、漢籍を学ぶための入門であり、習字も学問に携わる者が習得すべき唐様の書として、蘇東坡を学んでいるのである。一〇年後、二二歳で足利学校に入寮して六代庠主文伯に師事。先行研究¹⁾に拠れば、道三遊学の頃の修学内容は、古注を基本に新注も積極的に採用した儒書の講義を中心としつつ、仏書・国書が併講された。蔵書によってその講学の傾向を推し量れば、漢籍一九三部のうち「易」が二一部と突出した(仏書四二部、国書一七部)。道三は足利

学校での修学内容を余り詳しく書き残していないが、新田長矣という教師について「法華経」「金剛経」「心経」の講義を聴き、『心経仮字抄』『金剛拔萃』『法華聞書』を筆録したという（『当流医学之源委』）。後年、道三が講義した医書以外の書籍（『心経』『三体絶句』『論語』『三略』『職原抄』）の多くは、足利時代の修学を反映していると推測される。当然、定評ある足利の易学も学んだと考えられる。漢方・鍼灸の診断と治療の理論は陰陽五行と五運六気によって構成され、易学と深い関係があることは言うまでもない。

医書については、二五歳で導道（一四六五（一説に一四六二）〜一五三六生存）から古典的な医論『素問』を習ったのが最初で、併せて新刊の明・劉純『玉機微義』（一三九六序刊）を読み、また『用藥百二十種之功能』によって基本生薬の性質を学び、間もなく田代三喜に医学を学んだ。近年の遠藤次郎らの研究に拠れば、導道と三喜（一四六五（一説に一四六二・一四七三とも）〜一五三七（一説に一五四四とも））は兄弟であるともいうが、諸説があり定説をみるに至っていない¹⁴。その後五年間の修学によって、道三は三〇歳で三喜から奥義を伝授されるまでになった。三喜の医書は、今日知られている限りでは特異な作字や変名による薬名表記があり、作字や変名と通常の生薬名の対応を伝授されなければ理解できない高い秘伝性を持っていた。道三が三喜から吸収したものは、診断と治方に関する臨床的な治術であったと考えてよい。その一方で、学知については導道等から習うだけでなく、中国刊本を入手して独修することも可能であった。道三が足利での修学時代に入手し、長年にわたって頭書を加え続けた手沢本『丹溪心法』が養子玄朔に相伝されたことが知られている（後述の「印可伝授之日附属之医書」）。

帰京後の道三は開業して名声を得、それに従って門人が増加し、古典テキストや自著の講釈によって、修得した学知と医学を公開していった。道三が京都で講釈したテキストは、『難経』、*『全九集（真名本・仮名本）』、『本草序例』、『医方大成論』、*『十五卷（十五指南篇）』、*『切紙』四〇通、『察病指南』、『医学源流』、『和剂指南』、『運氣論』、『新本草古文序』、『明堂灸経』、*『丑時（老師雑話）』、*『日用薬性能毒（大・小）』、『明医雑著』、『医学正伝（或問）』、『崔真人脈訣

(東垣十書序)、『職原抄』、*『雲陣夜話』、*『茶話』、*『山居四要拔萃』、*『啓迪集』、『心経』、*『正心集』、『三体絶句』、『論語』、『三略』と医書以外の儒書・仏書・国書を含む二六種にのぼる(*は自著)。その講釈には毎朝一〇〇人ばかりの聴衆が詰めかけ、なかには一五〜一八歳程度の年少者も多かったと伝えられている(元和頃成立の『戯言養気集』に見える逸話による)。また一五七七年には養子玄朔に学塾啓迪院を開設させている。したがって、その講釈はかなり広く公開されていたと考えてよいであろう。

その一方で道三は、「对学侶宜使授与之次序」という九段階からなる「当流医学」の修学階梯を定めて、学習の進捗に応じたテキストを設定していた。

- 第一段階…『切紙の初』(一〇通)、『美濃医書』(『捷徑弁治集』とも)、『脈書』
- 第二段階…『切紙の中』(上一五通)、『十五指南篇』、『仮名本全九集』、『授蒙聖功方』
- 第三段階…『切紙の中』(下三〇通)、『真名本全九集』、『本草能毒』
- 第四段階…『切紙の奥端』(三五通)、『医灯藍墨』、『宜禁本草』
- 第五段階…『切紙の奥』(四〇通)、『雲陣夜話』、『可有録』、『鍼灸経』
- 第六段階…『切紙の外』、『茶話』、『山居四要拔萃』、『炮灸論』、『鍼灸禁穴解』
- 第七段階…『三家流』、『三国医源』、『鍼治聖伝』
- 第八段階…『大徳濟陰秘訣』、『雞旦祝酒三藥式』
- 第九段階…『啓迪集』

これらの書籍のほぼ全てが道三の自著であることは注目に値する。古典や新刊の漢籍による修学ではなく、自著によって、「当流医学」と自称する独自の臨床医学を修得させようとしている。このうち第一〜五段階に配当されている「切紙」は、文字通り裁断した紙に一〜数条程度の要訣を書いたものであり、歌道・武道・芸道でも秘説伝授の際に使用された形式

である。道三の「切紙」は、足利における導道・三喜からの伝承、同学の聞書からの転写、聖賢の要語等からなり、一五八二年七六歳までに計四〇通に及んだ。後年、一書として編集された『切紙』（一六四三刊）は四一ヶ条からなっていて、その数量はほぼ一致し、第一〜五段階の条数とも一致する。したがって第一〜五段階における「切紙伝授」は、『切紙』の巻頭から第一段階…一〇通、第二段階…五通、第三段階…一五通、第四段階…五通、第五段階…五通と行われたと推測され、「切紙」による基礎の上に個別分野の知識を附加していく学習システムになっていると見ることが出来る。初級（第一〜二段階）では湯液と診断が課され、次に中級（第三〜四段階）で食物と本草が加わり、上級（第五〜七段階）になって始めて鍼灸が課される。最上級の『啓迪集』伝授にあたっては、「大略熟学、而察彼心底慎勤、須授与」としている。

実際、『啓迪集』八巻の写本のうち古い時期に書写された伝本を調査すると、道三の自筆になる部分と道三の筆蹟とよく似た筆蹟になる部分が見出されるケースや、全巻道三の筆蹟に似た筆蹟になるケースが散見される。私見によればこうした事例は、長年にわたって道三に近侍し、書体が道三に極めて似通うまでになった信頼すべき一部の門人に限って、『啓迪集』の書写が許されたことを示すものであると思う。そうした一本と考えられる広島県三原市立図書館所蔵本においては、道三自筆が各巻表紙の題簽・目次、各巻頭の書題、各冊の匡郭に集中して見られ、この写本が道三の定めたフォーマットに従って道三の指示のもと複数の門人の分業によって書写されたものと推定される。このことは道三の生前、『啓迪集』の筆写は著者によって厳格に管理されており、無制限に公開されてはいなかったことを示すと考えられる。その他、文献によっては題簽や奥書や花押のみ道三自筆と見られるような写本も伝存するが、これらも著者による著述内容の保証を意味するものであり、自著を正確に流布するための管理であったと考えられる。

上記のように、道三は啓蒙的な著述や古典テキストの講義を通して学知を公開する姿勢を示したが、「当流医学」を記した自著については、その公開は無制限ではなく、著者によって一定の管理がなされていた。ここに写本時代における学知授受のあり方を見ることが出来る。

三 近世初期の医学知識の普及―曲直瀬玄朔を例として

次に道三に師事した者の側から、その「学び」を見てみよう。先に『丹溪心法』について言及したように、道三から養嗣子玄朔（一五四九―一六三一）に「当流医学」が相伝された際（一五七七）、道三手沢本のうちの重要典籍が授受された。それらは更に玄朔・玄鑑父子が豊臣秀次の失脚に連座して常陸の佐竹氏のもとに配流中であつた一五九六年に玄朔自身の手沢本と併せて玄鑑（一五七七―一六二六）へと相伝された。玄朔自筆の「印可伝授之日 附属之医書」（慶應義塾大学図書館所蔵「曲直瀬文書」）によれば、その相伝された本は次のとおりである。

啓迪集 予一世一部之本、常閲之、正誤字加頭書。

切紙 予常用之而令講釈之本。

医学正伝 一 溪居士自壮年至七十餘歳、常閲之、被加頭書。予頃加加點句読之本。

丹溪心法¹⁶ 一 溪在足利之時、得此本。常閲之、被加頭書。予少年之時、受相伝之本。

玉機微義¹⁷ 一 溪壮年之時、被加訓点。予洛読誦之本。

証類本草 一 溪自壮年用此一部、常被檢閲之本。

医林集要 一 溪頭書之本。

右自一溪居士令稟受之本、今悉附与之。

伝心方法 予今偶在常州而歴冬夏、編集一部而附属之。常宜考之。

道三より相伝した七部の書籍のうち、『啓迪集』『切紙』は写本、『医学正伝』『丹溪心法』『玉機微義』『証類本草』『医林集要』は恐らく明刊本と考えられる。これらの手沢本は、道三一代の講学成果としての頭書や訓点ゆえに重要視され、相伝

した玄朔はこれを死蔵するのではなく、日頃の講釈や読書に「常用」して更に頭書や訓点を追加していった。それは「当流医学」の直系継承者にとって基本文献に関する学知の集積に他ならず、子々相伝すべき貴重文献であった。

玄朔は道三の學術を祖述継承するだけにとどまらず、道三が主として明・嘉靖中（一五二一～一五六六）の出版医書、特に朱丹溪学派の書籍を重視したのに対して、玄朔はそれに加えて明・万曆中（一五七二～一六一五）の出版医書、特に龔廷賢の医書をよく学んだとされる。つまり道三から玄朔にかけて、輸入刊本によつて最新医学情報が追求され続けたと言える。⁽¹⁸⁾そして、その学習成果は最新文献の白本文のうえに訓法や注釈として蓄積されていったと見ることが出来る。

更に、道三が亡くなって間もなく、文祿・慶長の朝鮮出兵の結果、朝鮮の活字印刷技術が日本に伝わって活字印刷（いわゆる古活字本）が開始されたことは、玄朔等の講義にも一定の変化をもたらした。一六世紀までに日本で木版印刷された医書は、すべて中国の著作の覆刻であり、それもわずか三種にとどまっていた。明・正統期の福建の出版業者である熊宗立（一四〇九～一四八一）が編纂刊行したテキスト二種——『医書大全』二四卷（一四六七年刊本を一五二八年に覆刻）と『俗解八十一難経』七卷（一四七二年刊本を一五三六年に覆刻）——と、南宋・施発（一三世紀前半）の『察病指南』三卷である。出版文化の未発達な一六世紀までの日本では、聴衆全員が印刷されたテキストを事前に所有することは困難であり、短時間に写本できる部数にも自ずから限りがある。そこに新しくもたらされた木活字印刷技術は、版木の作成と収蔵のコストを節減できる軽便さが歓迎されたと考えられる。近世期の活字印刷はテキストのデータを保存することができないので、書籍の継続的な量産には不向きであったが、事前に聴衆の数が想定できる講義用テキストを印刷するような場合には極めて有効に働いた。慶長～元和間（一五九六～一六二四）に夥しく印刷された古活字本には多くの医書が含まれているばかりでなく、その印刷事業に京都在住の医者が関わっている例が多く、当時の印刷医書に対す高い需要と医書印刷に積極的に関わる医者の存在が知られる。

「印可伝授之日 附属之医書」の中の書籍で言えば、虞搏『医学正伝』八卷は、一五七七年明刊本『京板校正大字医学正

『伝』を覆刻し訓点を附した整版本（版式一三行二四字）が一六二二年に出版される以前に、活字版が少なくとも一〇回印刷されている。¹⁹⁾一五九七年～一六二二年の二五年間に一〇回の印刷はかなり高い頻度と言いうる。刊記からその印刷への関与が知られる医者としては小瀬甫庵・曲直瀬玄朔・医徳堂守三（玄朔門人斎藤松印の男）・梅寿（吉田宗恂門）がある。

小瀬甫庵（一五六四～一六四〇）は曲直瀬家と近い関係にあり、豊臣秀吉に近侍した医者でもあるが、一五九七年に最初に印行された古活字本『医学正伝』の跋文のなかで、中国本（刊本）と朝鮮本（活字本）を参照して、正しい方のテキストを採用したと述べている。また曲直瀬玄朔が一六〇四年に印行した時の跋文によれば、道三が本書を朱丹溪の医学を汲む著作として尊重していたので、玄朔もそれを継承して彼の門下生に対する講読のテキストとして本書を印刷すると述べ、このテキスト作成に当たっては、文字の誤謬や文章の脱漏を諸書を参考に補正したと述べている。実際、明代の商業出版は一般に宋代官撰書等と異なり誤脱が多いとされ、朝鮮の活字本も組版ミス等による誤脱は免れず、読書時にはしばしば校正を要したのである。

毎年のように特定の書籍を印刷し、そのテキストを繰り返し講義する過程で、活字本に不可避の不安定な本文は、明刊本・朝鮮本を併照しつつ誤脱が修訂され、テキストは次第に精良になり、また加点や加注によって読法や解釈も定まっていたと考えられる。

こうして漢籍が講義用テキストとして印刷される一方で、前掲「対学侶宜使授与之次序」に挙げた道三の著書の印刷出版の状況はどのようであっただろうか。近世初期印刷本を中心に示せば、次のようになる。

第一段階…『切紙』近世初期無刊記本、『美濃医書』寛永期活字本

第二段階…『十五指南篇』慶長期に数種の古活字本・一六三一年初版、『授蒙聖功方』古活字本・近世初期無刊記本、
〔仮名本〕全九集〕元和～寛永期に数種の活字本・一六三二年初版

第三段階…『本草能毒』玄朔による改訂を経た『薬性能毒』一六〇八年古活字本・一六二九年初版

第四段階…『宜禁本草』漢文体の近世初期無刊記本・和文体の一六二九年版本

第五・六・七段階の諸書は刊行されておらず、第八・九段階の著書には却って次の刊行が知られる。

第八段階…『大徳濟陰方』一六八〇年・一七一四年版本

第九段階…『啓迪集』一六四九年版本

つまり、初級のテキストは早く古活字本が印刷されて講義用テキストに供され、一六三〇年前後に相次いで木版となって流布した。しかし、奥義を記した『大徳濟陰方』や『啓迪集』は長く印刷に付されることなく、写本で流通したと見られる。木版化の際の曲直瀬家の関与などなお考えるべき問題があり、さらに個別に書誌データを積み重ねる必要があるが、全体的な傾向としては「当流医学」の流儀書の出版は漢籍とは差異が認められるであろう。

続いて、玄朔が最晩年を迎えた一六三〇年代以降、木版印刷が次第に普及して附訓点の安定した本文の書籍が大量に市場に提供されることによって、日本の読書環境は写本時代とは異なる時代を迎えた。医書を含めた輸入漢籍の覆刻自体は朝鮮・越南でも広く行われたが、朝鮮・越南の覆刻は基本的に中国刊本と同様の白文テキストであり、その意義は主として書籍流通の量的拡大にとどまった。これに対して日本では読者層の質的拡大にも及んだ。殆どの和刻漢籍は訓点を施した形で出版されており、その訓点に従えば、師匠に就くことなく日本語として漢籍が読めるようになった。かつまた「鼈頭注」のような日本独自の版式が生み出されて、欄外に大量の参考文献が加えられることによって、他の文献と引き比べることなく、読み進められるようになった。また「諺解本」などと呼ばれる、漢文を用いない漢字片仮名混じり文の注解も出回った。²⁰ 読者にとってこれらは大きな負担軽減であり、漢籍によって知識を学ぶことが一部の支配階級の占有でなくなり、市場に流通する商品によって漢籍の知識を学ぶことが可能になった。

四 近世中期、官学成立以前における「学び」

従来「学制」公布（一八七三年）に始まる近代教育によって四民平等教育が実現されたとする一方、近世期の教育は武士階級の「四書」等の漢籍による学習と農工商階級の往来物による学習とに分かれていたとされがちであるが、玉木吉保の例のように武士階級もその初級段階において往来物を通してなかったわけではないし、前記のように刊本が質量ともに変化するなか、庶民も漢籍を学ぶことに困難はなかった。湯島聖堂（後の昌平坂学問所）において一七〇〇年代初頭から幕末まで武士以外の町人も自由に聴講できる講義（仰高門東舎日講）が開かれていたことは、一八世紀前半の幕府の教学政策が町人にも儒学学習を奨励していたことを示すものである。

昌平坂学問所は寛政期の制度改革によって幕臣子弟の普通教育機関として位置づけられ、朱子学解釈による経書を公認テキストとした定期試験が実施され、その試験結果が任官に直結するようになった²¹。相前後して全国の諸藩に藩校が開設されることにより、私塾・寺子屋―藩校（各藩・地方）―昌平坂学問所（幕府・中央）といった修学階梯と学校運営主体を結びつけた進学モデルが形成された。しかしながら一九世紀以前においてこれは必ずしも当て嵌まらない²²。

忍岡にあった時代の林家塾は、孔子廟における儒教祭祀と幕藩体制を支える歴史・系図・法令の編纂部局の性格を併せ持つものであった。講釈も月に二、三度行われたが、諸説の異同や典拠を詮議する専門家向けの内容であったとされる（荻生徂徠『学寮了簡書』）。その後、一七世紀半ば頃から岡山藩・会津藩・水戸藩等、将軍と近い関係にある藩主の主導で行われた儒学奨励策は、宗門人別改めを契機に庶民からの収奪を強めた寺院勢力への抑制と抱き合わせにした思想統制の性格が強くなり、仏教には厳しい排仏棄釈となった半面、儒教には武士に限らず庶民まで視野に入れた普及啓蒙となって現れた。それに続く綱吉の儒書講義や湯島聖堂開設（一六九一）も諸大名から町人までの非専門家を対象とした啓蒙的な意味合いが強かった。かくて一八世紀までの湯島聖堂や藩校は、修学成果が人材選挙と結びつく一九世紀以降のそれとは性格を異にした。し

たがって近世中期までの「学び」を具体的に考えるには、幕藩による公的教育体制を中心にすることは困難であり、前代から引き続き学問の中心であった京都等の私塾に着目する必要がある。

五 近世前期～中期の医学の学び

京儒・江村北海（一七一三～一七八八）は『授業編』²³（一七八三序刊）で、毎年、京都に日本各地から遊学する数百に上る学生のうち、実に「十二八、九八医家ノ子弟」であると述べている。当時の遊学生を出身階層別に数量化することは困難だが、学問を必要とする専門職の占有率が高いことはある程度予測できる。武家家臣団にあつて、医者と儒者は学問を必要とする専門職の代表であるが、近世前期の幕藩体制形成期に医学・儒学ともに生じた人材の需要は既に去つており、中期以降は家格がほぼ固定して新たなポストは多くなかつた。特に儒者はまだ藩校の数が限られていたから、儒職は藩士教育ではなく藩主と子弟の教師役を負つた。

これに対して医療はどの地域にとつても常に緊要で、支配階級に附属する医療従事者は、専門別（内科・外科・眼科・婦人科・小児科・鍼灸科）に毎日昼夜交替で勤番する必要から、自ずとその需要も多かつた。幕末における幕臣を例に取ってみても、儒者は三〇家に満たないのに対して医者は二〇〇家を超えていた²⁴。また將軍や大名とその一族のような要人が難病に罹つたとき、正規の医員以外からも施療を受けることも珍しくはなく、非常事態に備えた人材のプールも行われていた。したがつて、江村北海の言の通り、近世中期にあつて京都遊学という強い学習志向を持つものの中で医学生が突出したことは想像に難くない。

多くの医学生を含む修学人口に支えられて、儒者・医者の中には仕官後もなお京都の基盤を維持する者や、仕官を望まず京都の家塾に講学する者も少なくなかつた。儒者では藤原惺窩門の松永尺五は仕官せず子孫が代々京学（朱子学）を守つ

た。同じく惺窩門で医学にも通じた堀杏庵は広島藩と尾張藩に仕官した後も京都の家塾を存続して門下に黒川道祐（？～一六九一）が出、曾孫の堀景山（一六八八～一七五七）門に本居宣長（一七三〇～一八〇一）が出た。同じく惺窩門の那波活所に学んだ鶴飼石斎（一六一五～一六六四）は、尼崎藩儒を致仕後、京都で医書を含む三〇余種六七〇巻以上の漢籍に訓点を施して刊行した。

医者では、道三門の理慶を父に持ち自身は吉田宗恂に学んだ長沢道寿（？～一六三七）が致仕後、双岡で医学を講じ「小学七科」「大学八科」という医学修得の階梯を立てた。²⁵ 玄朔門人とされる饗庭東庵（一六二一～一六七三）は専ら内経医学を講じ、門下に味岡三伯・吉弘玄仍・竹中通庵等が出て、三伯門に浅井周伯（一六四三～一七〇五）・小川朔庵・岡本一抱（一六五四～一七一六）・井原道闕（一六四九～一七二〇）等が出た。浅井家は尾張藩医として仕官後も京都の家塾を維持した。朔庵門の堀元厚（一六八六～一七五四）や周伯門の松岡玄達（一六六八～一七四六）は、仕官せず講学を生業としその成果を出版している。本格的な木版印刷の時代を迎えて、出版業の盛行が、儒者・医者の生活を一定程度支えた。

地方から上京した遊学生は、初め書肆などで入塾先を紹介してもらい、そのうち友人ができればその評判をもとに別の師匠に入門し、複数の塾に出入りすることが普通であった。江村北海が予習復習する暇もないと批判的に描写しているように、早朝に医書の講義に出席し、下宿に戻って朝食を済ませ、テキストを取り換えて次は儒書の講義に出席し、昼食後、別の儒書の講義に出席し、帰って医書の夕講、夕食後は本草の夜会といった具合に、学生たちは複数の塾に通って儒学と医学を兼学する数年間を送った。（『授業編』巻四・書生之学）。こうした儒者と医者との密接な交渉の中で近世京都の私塾は営まれ、そこに自ずから相互に影響関係も生じたと見ることができるといえる。

例えば、上層町衆の出身で仕官を求めず医業を兼ねず、古義堂を興して宋学的解釈から脱却し孔・孟への復古を唱えた伊藤仁斎（一六二七～一七〇五）も、その門人帳の入門者や紹介者には多数の医者を見出す。京都在住で加賀藩に仕官した本草家稻生若水（一六五五～一七一五）は仁斎・東涯父子や古義堂一門と親交があった。江戸から上京して古方派の先駆と

なった後藤良山（一六五九～一七三三）も仁齋と交流があり、姫路出身の良山門人香川修庵（一六八三～一七五五）は仁齋の高弟の一人である。仁齋と良山は高踏的な理論を去り学問の本来あるべき姿を質朴に追究した点で共通する。東涯と若水はその博大を志向する学風において照応する。修庵は近世期刊の『傷寒論』のうち最も普及した「小刻傷寒論」を校訂刊行したが、その古方医学は、仁齋直伝の『論語』『孟子』を熟読して得た「孔孟の血脈」を判断基準として、『素問』『靈樞』等の医説を批判的に取捨しようとするものであった。⁽²⁶⁾

一八世紀半ばからは、同じく古方派を標榜しても、徂徠学の影響をより強く受けた山脇東洋（一七〇六～一七六二）⁽²⁷⁾ や吉益東洞（一七〇二～一七七三）が出た。特に広島から上京した吉益東洞は『傷寒論』『金匱要略』の条文を処方ごとに再編した簡便な処方集『方極』（一七六四刊）・『類聚方』（一七六四刊）等を刊行して臨床家に歓迎され、全国から門人を集めた。⁽²⁸⁾

かくて、近世京都では伝統を継承する旧来の在住者に加えて、地方からの新奇加入者による私塾が次々に生まれ、それが医学生を多く含む遊学者の需要を満たし、地方に次々に新しい学問を供給していたと言える。

さらに一八世紀に入る頃からは、京都での遊学成果を地方に還元するだけにとどまらず、大坂の有力商人や河内在郷の豪農層のような比較的恵まれた経済基盤を背景とする地域では、「学び」の場を自主的に形成する者が相次いだ。河内国平野郷では土橋友直（一六八五～一七三〇）が主導して救荒時のための備蓄から発展させて郷学含翠堂を開設し、早く元禄年間⁽²⁹⁾ に三輪執斎（一六六九～一七四四陽明学派）が出講し、続いて享保年間には伊藤東涯（一六七〇～一七三六）・三宅石庵（一六七六～一七三〇浅見綱齋門）・五井持軒（一六九七～一七六二）・三輪執斎ら多様な学問系統の学者を招聘して儒学を講じさせた。大坂に開塾した三宅石庵は有力商人らの支持を集め、門下に中井斂庵（一六九三～一七五八）らが出て、現在まで続く懷徳堂の流れを創った。⁽³⁰⁾ 河内国八尾には環山楼や鱗角堂といった私塾が開設され、一八世紀前半には伊藤東涯らが、一八世紀後半には片山北海（一七二三～一七九〇）を盟主とする混沌社中らがこれに関与した。京都遊学時に撰取した

多様な学問が、多様な講師の招聘によって郷学でも継続されたと見ることが出来る。

三輪執斎が述懐しているように、一向宗が民衆に深く浸透した郷地域では、当初、儒学の普及に対して民衆の間に強い抵抗があったが、前述のように宗門人別改め等を契機として精神面での仏教乖離が進むなか、時間の経過とともに儒学への理解者が増えていった。特に知識階級を中心に、一八世紀後半には仏式の火葬を廃して儒式の土葬に改める者も広がった。⁽³²⁾ 仏教から儒教に転換し、儒葬を採用した八尾の郷医・田中祐篤（一七六七～一八二五）⁽³³⁾ を例に取れば、祐篤が大坂で片山北海・尾藤二洲・中井履軒らに親炙して得た儒学は、徂徠学によって開かれた儒学本来の趣旨と宋学の修養論とを兼採した折衷学であった。⁽³⁴⁾ 宋明学か復古学かという思想上の二者択一ではなく、その折衷を選択したことにより、葬儀に象徴される日常生活を規定する原理に朱子学の修養論が採用される一方で、新たな学問領域が確保された。祐篤の場合は、木村兼葭堂（一七三六～一八〇二）らとの交流を通して、本草学・蘭学による「物」を対象とする學術が開かれた。近世後期に広く見られる漢蘭折衷と言われる学風の基本的な性格がここに看取される。⁽³⁵⁾ こうした学問環境が、一八〇〇年前後には一握りの都市の知識人だけでなく、その周辺の在郷地域にまで相当の広がりをもつようになっていたのである。

六 近世後期—幕府医学館における「学び」

徳川幕府の公的な医学教育機関の設置は、幕府医官の多紀元孝（一六九五～一七六六、家禄二〇〇俵）が一七六五年に幕府の認可を得て躋寿館を開設し、⁽³⁶⁾ 一七九一年に幕府直轄の医学館となった時に始まる。これより先、吉宗の治下、半井家（和気家の子孫、家禄一五〇〇石）と今大路家（曲直瀬玄朔の子孫、家禄一二〇〇石）が典薬頭として医官推挙権を持つことが確認され、典薬頭の下に医官の指揮系統を一元化することが構想されたが、吉宗の殖産興業政策の面を推進した田沼意次の時代を挟んで、弛緩した綱紀の立て直しと併せて官僚機構を再生産する仕組みが模索されるなか、学校が相次いで直轄

化された。

儒学における林家の私塾が官学「昌平坂学問所」へと改組された際に、前述の混沌社同人の中から柴野栗山（一七三六～一八〇七、一七八七召出し）・尾藤二洲（二七四五～一八一四、一七九二召出し）・古賀精里（一七五〇～一八一七、一七九六召出し）らいわゆる寛政の三博士が登用された。それと揆を一にして、多紀家の私塾から官学「医学館」への改組の際にも、京都から人材が登用された。福井楓亭（一七二五～一七九二、一七九〇召出し、内科）・池田瑞仙（一七三六～一八一六、一七九六召出し、痘科）・小野蘭山（一七二九～一八一〇、一七九八召出し、本草）である。林家では七代錦峰が柴野栗山以下の登用学者たちと対立したまま早世し（一七九二）、そのあと岩村藩主の子述斎（一七六八～一八四一）を迎えて漸く学制改革が軌道に乗るのに対して、多紀家では元孝のあと、元惠（一七三二～一八〇一）・元簡（一七五五～一八一〇）父子主導のもとで比較的順調に学制が整った。いずれにせよ、一八世紀末に幕府の直轄学校を整備するに当たり、京坂の学者を糾合して体制作りをしたと見ることができ³⁷。

初め一七六五年の開設に当たり、儒者井上金峨が著した『医学館経営記』³⁸では、「道」を「物」と「則」に分ち、則（＝儒）が詩書・礼楽によって彝倫を治める堯帝・舜帝・文王・武王・孔子の教であるのに対し、物（＝医）を陰陽・五行によって疾病を治める神農・黄帝の教と規定して、医学が儒学と並ぶ学問領域であるとし、医学の儒学からの独立を謳っている。人体構造・生命現象に不変性を認める考え方は、古方派の山脇東洋等にも既に見いだせる。その不変性を探求する際の方法において、東洋は日本初の解剖を行ったが、その目的は『周礼』に説かれた「九藏」を確認することであり、いわゆる科学的な実験と同一視できるものではなかつた³⁹。次代には、中国古典の規範性から脱却して新たに西洋に規範を求めることにより「人体」に接近していった者と、あくまで古典に注視しながら規範としてではなく「文献」として対象化する者とに分かれていった。医学館においては、一七九一年の官立化を契機に為政者への医療行為担当者として、学術の安全性と確実性を追究する傾向が強まり、その臨床上の因子に支えられ、傍ら清朝考証学の影響を受けて、医学古典を歴史文献学的に

研究する「学び」が志向された。

但し、医学館の学問は、ともすると蘭学・洋学を敵視し中国古典の文献研究にのみ没頭したと見られがちであるが、一九世紀初頭までは国外情勢に対する視野を一定程度備えていた。一八世紀末のフランス革命とそれに続くナポレオン戦争によってヨーロッパの政治情勢が激変した結果、ロシアやイギリスの対日交易要求といった形で、ヨーロッパ情勢が日本に直に影響を及ぼす事態が現実のものとなりつつあった。こうした中、多紀元簡は主に新刊の輸入漢籍をいち早く購入して世界情勢を捕捉したし、蘭学者桂川甫周も医学館に外科を講じていた。また、医学館との関係を保ち、その医学を支えた儒者たちは、折衷学（井上金峨一七三二～一七八四）や考証学（吉田篁墩一七三一～一七九八・大田錦城一七六五～一八二五）を、自覚的に標榜した人物たちであった。彼らは中国古典の歴史文献研究を得意としたが、一方で激変する内外情勢にも敏感であった。例えば、吉田篁墩は文献学者として優れているだけでなく、北方問題・海防問題にも見識を持った。大田錦城も緊張する北方情勢に関する著述を著している。深刻な情勢認識に立つ錦城は、一七世紀のケンペル『日本志』に依拠した志筑忠雄『鎖国論』を鵜呑みにして、蝦夷地を「域外」と見なしてロシアとの緩衝地帯にしようとする松平定信らの判断に明らかに批判的であった。⁽⁴⁰⁾

しかしながら、包容力に富んだ元恵が亡くなり、博識の元簡が急死した後、他方では天文方⁽⁴¹⁾が蛮書和解御用を設置して洋書翻訳のために全国から洋学者を糾合するようになった（一八一―）。洋学者の多くは医業従事者であったので、一八一〇年代以降になると医学館の「学び」は初期の広い視野や自由闊達さを次第に失い、古典文献への傾斜を強めていった。

元来、医学館での基本となる授業科目は、六種の医学古典（『本草経』『靈枢』『素問』『難経』『傷寒論』『金匱要略』）の講義であった。教学を主導する正規の教官（世話役、教諭とも言った）は本道（内科）を講じ、外科・痘科・小児科・鍼科・眼科・本草などの専門科目は別に任命された講師が講義した。また儒書が併講された時期がある。

直轄化後の一七九四年に実施された試験の記録に拠れば、本科一〇人、小児科六人、外科四人、口科二人の計二二人が受

験した。試験形態は筆記による診断と処方、および口頭試問からなり、出題と評価は六人の世話役が担当した。成績優秀者の多くが有利な任官を果たしていることから、試験結果が医官人事にリンクしていたと考えられる。⁽⁴²⁾ こうして、幕府医官の人事権が典薬頭から医学館世話役へと移動した。

春秋ごとの定期試験に加えて一八六二年には五年毎の大試業が定められた。幕末時の記録によれば、春は方書と専門科、秋は内経医学を問う試験であった。大試業は六次の試験が課され、医学古典の注釈を指定して出題範囲を特定している。馬詩と張介賓の注解による流布本『素問』『靈樞』と、千田玄知翻刻（一六五二年版の覆刻）にかかる王惟一『難經集注』をあげるほかは、すべて多紀家の注釈であり（多紀元簡『傷寒論輯義』『金匱要略輯義』『素問識』『靈樞識』、多紀元胤『難經疏証』、多紀元堅『傷寒論述義』『金匱要略述義』）、多紀家の注解が古典解釈の標準となっていた。多紀氏歴代の著作は医学館における講義用の教科書の意味を持っていたことがわかる。

昌平坂学問所に幕臣用の寄宿寮が設けられたのと同じく、医学館でも医官子弟のための寄宿舎が遅れて設置されたが（一八四三）、昌平坂学問所に諸藩からの遊学者用の書生寮が設置されたのとは異なり、諸藩医・町医の寄宿舎は繰り返し申請にもかかわらず設置されなかった。⁽⁴³⁾ しかしながら世話役多紀元堅（一七九五～一八五七）の入門帳には多数の藩医子弟が見出され、一八四〇年代の医学館改革によって藩医・町医のための別会が増設されているので、多紀家家塾が諸藩医子弟のための代替施設として機能し、別会に優秀な人材が供給されたと見なされる。⁽⁴⁴⁾ 但し、あくまで「医学古典の文献研究」に限った優秀な人材であった。元堅歿後、明治維新を一〇年後に控えた年に種痘所（一八五八、一八六一西洋医学所→一八六三医学所）が開設され、漸く幕府の西洋医学教育が始まると全国から医学生が集まり、急速に発展していったことも周知の通りである。

一八四三年に藩医・町医のために増設された別会では、精密な講義が展開され、渋江抽斎、森枳園らによって、講義ノートを基にした有用な古典研究書が編まれた。⁽⁴⁵⁾ 上記の多くは『新修本草』『黄帝内経太素』等の古写本・古刊本が資料発掘さ

れたことにより、多紀元簡等の従来の文献研究に再検討の余地が生じたことから着手されたと考えられる⁴⁶。このことは新資料が文献研究に活用され、その最新の研究成果が直ちに教育現場に提供をされていたことを示している。

まとめ

中世～近世期の初等医薬知識の啓蒙普及は、商業出版が本格化する以前の段階において、既に韻文形式や大和言葉・記録体で著された啓蒙的な著作によって、漢文の原書を読むことなく、広範囲の読者が実生活に直結する保健衛生を中心とした医学知識を学ぶことが可能になっていた。

中世末期の曲直瀬道三は、その師の世代の学術が強い秘伝性を持ったのに比べ、漢籍講義などをおして学知を公開したが、自著による「当流医学」の修学には階梯を設け、特に『啓迪集』などの最上級テキストは厳格に管理され、写本時代の学術授受のありかたを残している。

道三の手沢本を相伝して「当流医学」を継承した玄朔の時代になると、木活字印刷によって講義用テキストの印刷が可能になった。不安定な活字本の本文に、講義が反復される中で次第に本文校訂や訓法・注釈が加えられ、次代の木版印刷に安定した本文と解釈を準備する役割を果たした。道三自著のうち、初中級テキストは講義用テキストとして早く活字印刷され後に木版となったが、奥義を記した上級テキストは秘伝書としてかなり後まで写本で流通した。

木版による附訓点漢籍の流通によって読書層は拡大したが、幕藩直轄学校は未発達であった。学問の中心地である京都の私塾には、全国から医家子弟を多く含む遊学生が集まり、儒者と医者には密接な交渉があった。一八世紀後半には地方に郷学が形成され、生活規範の仏教から儒教への転換が都市部以外でも広がり、宋明学と復古学の対立を超克した折衷学が受け入れられた。

一八〇〇年前後に全国的に藩校が漸増するなか、江戸では医学館が幕府直轄となり、医官の養成と選抜が行われた。医学館の教学を主導した多紀氏とそれを支えた儒者の学風を反映し、また安全確実な学術の習得という官立医学校の目的とも合致するところから、医学古典の「学び」が重視された。昌平坂学問所における異学禁令に対して、医学館では異学者の系譜が関与した。任官と試験結果をリンクさせた選抜試験が行われ、多紀氏歴代の著書が医学古典の教科書となっていた。また、医官子弟が出席する普通レベルの講義のほかに、幕末には多紀氏の家塾に学んだ諸藩医・町医が出席する上級の講義が設けられていた。直轄化後は人事面で硬直化が見られ、また興隆する洋学との対立が深まるなか、直轄化以前の闊達さが損なわれた。

本稿はバリ第七大学の堀内アニック美都教授、およびハイエク・マティアス准教授の編集にかかる論文集 *Way of learning, use of books* (Brill 出版社刊行予定) のために寄稿した“The Evolution of ‘Learning’ seen in Early Modern Japanese Medicine”を基に改稿したものである。

注

- (1) 『第二期戦国史料叢書七 中国史料集』(人物往来社一九六六) 所収。玉木吉保の修学については、『世界教育史大系』巻一(講談社一九八二) 八五頁に、石川松太郎による分析がある。
- (2) 一三歳—朝・心経・観音経の読誦、日本国中の諸々の神仏への礼拝、日中・習字(いろは↓仮名文↓真名字)、夜・読書(庭訓往来・御成敗式目・童子教・実語教)
- 一四歳—読書・論語・和漢朗詠集・四書五経・六韜三略、習字・草行書
一五歳—読書・古今集・万葉集・伊勢物語・源氏物語・八代集、習字・楷書
- (3) 『和刻漢籍医書集成』(一九九一〜九二、エンタプライズ) に影印所収。
- (4) 実見した著作、データベースから抽出した著作等を併せて、和歌の形態による医書を掲出しておく。
- 【総論】曲直瀬道三『盍静翁詠歌』、古林見桃『医療歌配剂』、亀井南冥『古今斎伊呂波歌』、『家伝脉菜味五臓之歌』

- 【養生】曲直瀬道三『養生誹諧』、曲直瀬道三『養生和歌』、甲斐徳本『喰合禁物集』、中島仙庵『歌養生』、津田有栄『養生要歌』、多紀元恵『養生歌八十一首』、大津賀仲安『合食禁歌』、大津賀仲安『食品国歌』
- 【本草】秦貽『和歌本草』、中林玄智『庖人集要禁本草之歌』、『宜禁本草集要歌』、『和歌食物本草』、中林玄智『新撰抜粹証類本草和歌』、山岡元隣『和歌食物本草増補』、『和歌能毒』
- 【診断】『古今拾的診候脉訣和歌』、『廿四脉之歌』、『二十七脉歌』『経脉歌』
- 【方論】中島仙庵『婦人科和歌』、『治病歌』、『道歌医方覚書』
- (5) 道三の養生和歌に関する先行研究に、八木意知男「論説 曲直瀬道三『養生和歌』」(『神道史研究』四九―二、二〇〇一)、小野裕子「曲直瀬一溪道三『養生和歌』をめぐって 附『養生和歌』翻刻」(『立教大学大学院日本文学論叢』二、二〇〇二・〇九)、八木意知男「論説 曲直瀬道三『養生和歌』」(『神道史研究』四九―二、二〇〇一)等がある。
- (6) 影印本にオリエント出版社『臨床鍼灸古典全書』五四(一九九四)があり、先行研究に浦山きか「うたっておぼえる「ツボ」の文化―謡本十四経穴歌の背景」(勉誠出版『アジア遊学』一〇五、二〇〇七・一二)等がある。
- (7) 『中外医事新報』に二四回にわたって連載された(一九二八―三〇)。「研究成果報告書ワークショップ曲直瀬道三―古医書の漢文を読む」所収。
- (8) 『黄素妙論』には一五五二年に道三が松永久秀に授けた奥書をもつ写本も伝わる(東北大学狩野文庫所蔵)。印刷本では一七世紀初期の伝嵯峨本から一九世紀にいたるまで、少なくとも五種類が存在し(長澤規矩也『図書学参考図録』第二輯、汲古書院一九七六)、その他に古写本や版本からの転写本が残されていて、近世期を通じて流布した。
- (9) 『黄素妙論』の原本を明刊本『素女妙論』であると述べるのは、太田南畝「一話一言」巻五が最も早い(『太田南畝全集』第一一巻、二二三―四頁、岩波書店一九八六)。但し南畝の所見本は嘉靖一一年刊本からの写本という。『黄素妙論』『素女妙論』については、拙稿「曲直瀬道三『黄素妙論』にみる房中養生について」『研究成果報告書ワークショップ曲直瀬道三―古医書の漢文を読む』(二松学舎大学二一世紀COEプログラム、二〇〇九)を参照のこと。
- (10) 同書は、武田科学振興財団杏雨書屋に所蔵される写本が唯一の伝本。本書をもとに時系列で再編したとみられる「道三家譜」が賀屋松庵『小児療治集』(一六六一刊)に収録されている。ともに前掲『研究成果報告書ワークショップ曲直瀬道三―古医書の漢文を読む』に収録。
- (11) 足利行述『鎌倉室町時代之儒教』(日本古典全集刊行会一九三二)、結城陸郎『足利学校の教育史的研究』(第一法規出版一九八七)など参照。
- (12) 足利学校の易学に、『周易』の解釈を教える「正伝」と占筮を教える「別伝」があったとされる(『鎌倉室町時代之儒教』六一―頁)。
- (13) 従来、導道と田代三喜は同一人物と見られることが多かったが、同一人物説は江戸期の出版物(黒川道祐『本朝医考』・原南陽『三喜直指篇』等)に由来する。曲直瀬道三の文献を見ていくと、導道は渡明経験をもつ人物で、また支山人・範翁と号し、三喜とは別人とし

て記される。

- (14) 「導道・三喜別人説」の検討(『日本医史学雑誌』四四巻四号、一九九八)、「曲直瀬道三の前半期の医学(1)——「当流」の意義——」(『日本医史学雑誌』四五巻三号、一九九九)、「月湖編纂大徳濟陰方の再検討」(『漢方の臨床』四六巻一〇号、一九九九)、「月湖編纂全九集の再検討」(『漢方の臨床』四六巻一二号、一九九九)等を参照のこと。『今大路家記鈔』によれば、導道・三喜兄弟は鎌倉円覚寺(建長寺とも)の支院江春庵に学び、渡明経験はなかったが、金沢に漂着した明船が舶載していた医書によって最新医学を学んだとも言われる。
- (15) 一般に『大徳濟陰方』と言われる書で、錢塘出身の月湖の著作とされるが、道三による偽作説が疑われている。
- (16) 『丹溪心法(附余)』二四巻は、玄朔に相伝した後から道三が入手した別本と思われる天正二一年の道三識語を持つ養安院家旧蔵の一五〇七年明刊本が伝存する(京都大学富土川文庫所蔵)。
- (17) 劉純『玉機微義』五〇巻は、道三手沢の一五三〇序明刊本が伝存する(研医会図書館所蔵)。
- (18) 真柳誠は近年、「中国古医籍が日・韓・越の伝統医学形成史に与えた影響の書誌学的研究」をテーマとして、日・韓・越における覆刻漢籍医書を調査し、一六〜一七世紀にかけて日本の曲直瀬道三『啓迪集』、朝鮮の許浚『東医宝鑑』、越南の黎有卓『医宗心領』といった個人の編纂した医学全書が各国医学の体系化の役割を担ったことに着目し、それらの著作の引用書籍を調査して、『医学正伝』『医学入門』『万病回春』等、日・韓・越に共通して影響を与えた中国医書を明らかにしている。
- (19) 川瀬一馬『古活字版之研究』所収本、および管見に入った古活字本『医学正伝』は以下のとおり。①一五九七年京都小瀬甫庵印本、一三行二〇字有界双辺。②一六〇三年京都医徳堂守三印本。③一六〇三年曲直瀬玄朔跋京都下村生蔵印本、一三行二〇字有界双辺。④一六〇四年京都曲直瀬玄朔跋印本、一三行二〇字無界单辺。⑤一六〇三年曲直瀬玄朔・一六〇五年京都下村生蔵印本、一三行二〇字有界双辺。⑥一六〇四年曲直瀬玄朔跋・一六〇七年印本、一三行二〇字有界双辺。⑦一六〇三年医徳堂守三跋・一六〇六年印本。⑧一六〇六年六条鏤版印本。⑨一六二一年京都梅寿印本、卷一医学或問のみ、一三行一九字無界双辺。⑩一六二二年京都梅寿印本、一三行二〇字有界双辺。
- (20) 日本で漢籍の国訳を「諺解」と称するものは、寛永中に林羅山が『三略』『孫子』『性理字義』の「諺解」(いずれも写本)を作っているのが早く、万治・寛文以降、諺解本の出版が始まる。分野別に見ると、算学書に多数の諺解本が作られた。医書では岡本一抱(一六五五頃〜一七一六頃、近松門左衛門の実弟)が貞享〜享保にかけて多くの諺解本を出版した。「和字抄」「和語抄」と称するものも多い。一八世紀後半になると「国字解」と称するものが増加する。
- (21) 橋本昭彦『江戸幕府試験制度史の研究』(風間書房一九九三)を参照のこと。一九世紀以降の公的学校の普及と進学モデルの形成が、明治以降の学歴社会を準備したとも言える。
- (22) 全国諸藩における藩学の開設は、天明・寛政期(一七八一〜一八〇二)を画期として急増する(笠井助治『近世藩校の総合的研究』吉川弘文館一九六〇)。
- (23) 活字本としては『少年必読日本文庫』卷三(一八九一〜九二博文館)、『日本教育文庫 学校篇』(一九一〇〜一一同文館)に収録され

- ている。
- (24) 儒家の数については、「昌平坂学問所日記」I（斯文会一九九八）所収の橋本昭彦解説（表二）による。医家の数については、原資料に『官医家譜』（国立公文書館所蔵）等があり、近著では青木昇『幕府医師団と奥医師青木春岱』（崑書房出版二〇〇七）に附録される幕府医師総覧がある。
- (25) 拙稿「長沢道寿『藪医問答』の解題と翻刻」（『日本医史学雑誌』五六―一、二〇一〇）参照のこと。
- (26) 拙稿「香川修庵の「儒医一本」の儒について―『大学叢』を中心として―」（『日本医史学雑誌』四四―一、一九九八／〇三）を参照のこと。
- (27) 山脇東洋や吉益東洞は、林東溟や山県周南の門人をおして徂徠学に接した。拙稿「山脇東洋と徂徠学派―『外台秘要方』翻刻をめぐる―」（『日本中国学会報』五〇、一九九九）を参照。
- (28) 拙稿「吉益家門人録の考察」（『日本医史学雑誌』四七卷一号二〇〇一）を参照。
- (29) 含翠堂の歴史に関する研究には津田秀夫『近世民衆教育運動の展開』（御茶の水書房一九七八）・梅溪昇『大坂学問史の周辺』（思文閣出版一九九一）等があり、資料目録に『含翠堂（土橋）文庫目録』（大阪大学附属図書館一九七二）、資料集に『平野含翠堂史料』（清文堂出版一九七三）がある。
- (30) 明治末期に西村天囚らの顕彰によって懷徳堂は復興し、その関連資料が大阪大学文学部に所蔵され、『懷徳堂文庫図書目録』（一九七六）が備わる。
- (31) 「執斎雜著」巻一「原（※平）野学問所之事」（『日本倫理彙編』第二所収）。
- (32) 山中浩之「在村医家の形成と儒教―八尾田中元緝を中心に―」（『大阪の歴史と文化』和泉書院一九九四）によれば、養父三上如幽の葬儀（一七一三）を土葬に改めた土橋友直などが早期の例として知られ、八尾郷の医家田中祐篤は父祐庵の葬儀（一七九六）に際して儒葬に改めた。田中家歴代の儒式墓が八尾市大窪の来迎寺に残されている。田中祐篤とはほぼ同時期に、久宝寺村の安田春益や富田林村の竹島浩庵ら祐篤の交友圏にあった医者の中にも、儒葬への転換の動きが見られるという。
- (33) 八代祐篤蒐集の書籍・書画を中心とした田中家伝史料（彌性園文庫）が、武田科学振興財団杏雨書屋に収蔵される。
- (34) 田中祐篤は師片山北海の三年忌に作った祭文のなかで北海の學術を、徂徠学が始めて本来の儒学を明らかにしたが、一方で道学が廃れたため、そこに折衷学が生まれた。折衷学によって徂徠学を批判的に継承した者は宇野明霞であり、それに賛同したのが片山北海であったと捉えている。拙稿「田中彌性園文庫に所蔵される書画と近世京坂の儒学・医学」（『杏雨』一五、二〇一二）を参照のこと。
- (35) 従来よく言われる、古方派の標榜する「親視実験」の姿勢が近代科学導入への道を拓いたとする見解に対しては、近年、山田慶児「反科学としての古方派医学」（岩波書店『思想』九八五、二〇〇六・〇五）等の批判がある。福井・佐賀など幕末の洋方医学の先進地域でも、一九世紀中頃に至って漸く漢方に洋方を兼採したかたちをとった所が少なくない。
- (36) 医学館の事蹟・業績に関しては、拙稿「医学館の学問形成（一） 医学館成立前後」「医学館の学問形成（二） 寛政の改革期の官医た

- ちの動向―『よしの冊子』の記事から―「医学館の学問形成(三) 幕末考証学の位相」(『日本医学雑誌』四五―三・四、四六一―、一九九九―二〇〇〇)、および「医学館の軌跡―考証医学の拠点形成をめぐる―」(『杏雨』七、二〇〇四)を参照のこと。
- (37) 拙稿「江戸医学館における西国からの人材登用について」(『泊園』二〇一〇・〇四) 参照のこと。
- (38) 東京・矢数氏所蔵の多紀元堅による筆写本のほか、カリフォルニア大学サンフランシスコ校図書館所蔵写本などが残る。
- (39) 山脇東洋の解剖の意義については、山田慶児「医学において古学とは何であったか―山脇東洋の解剖学と職業および学問としての医の自立」(『歴史のなかの病と医学』思文閣出版一九九七)を参照のこと。
- (40) 拙稿「閼微草堂筆記を読んだ考証学者たち」(『江戸文学』三八、二〇〇八)を参照のこと。
- (41) 天文方とそこに置かれた蛮書和解御用については、大久保利謙『日本の大学』(玉川大学出版部一九九七)「蛮書調所」や山田慶児「幕府天文方成立の歴史的意義」(『天文月報』九八―一六、二〇〇五・〇五)等を参照。
- (42) 戸出一郎「医学館における医学考試について」(『日本医学雑誌』四八・一・二) 参照。
- (43) 安政六年(一八五九)に起草された『医学寮造立願書草稿』(東京大学総合図書館V一〇・四一四)が残されている。『国書総目録』には浅田宗伯の著書として記録するが、私見ではその筆跡から橘宗俊の著と推定される。
- (44) 多紀元堅の家塾入門者の入門年時・姓名・出身については、拙稿「新出の多紀元堅門人録について」(『漢方の臨床』五〇巻三・四号、二〇〇三)を参照。
- (45) 幕末の医学館は、次第に医学所に圧倒されて凋落し、講義も開かれなくなっていたという見方もされていたが(川瀬一馬「御目見医師講義聴聞 躋寿館出席留」『日本書誌学之研究』講談社一九七二)、一八六五―一八六八年にかけて講義された森根園『傷寒論攷注』に記された講義の日付から、医学館の講義が最末期まで継続されていたことが知られる(拙稿「在外日本漢文資料探訪・上海・杭州」『日本漢文学研究』一、二〇〇六)。
- (46) 拙稿「小島宝素・海保漁村の天保一三年の京都訪書行―『経籍訪古志』成立の一過程―」(『東方学』九六、一九九八)を参照のこと。

【キーワード】

・ 曲直瀬道三 ・ 曲直瀬玄朔 ・ 印刷 ・ 私塾 ・ 医学館

Developments in “Learning” as Seen in Medicine in Early Modern Japan

Machi Senjurō

The popularization and dissemination of medical knowledge in elementary education in the medieval and early modern periods prior to the first half of the seventeenth century, when commercial publishing began in Japan in earnest, was such that it was already possible for a broad spectrum of readers to gain knowledge of health and hygiene, without having to read classical Chinese, from works written in verse or in the documentary style using native Japanese vocabulary.

When we turn our attention to the initial stages of publishing culture and scholarship, the transmission of the scholarship of Manase Dōzō 曲直瀬道三 and Manase Gensaku 曲直瀬玄朔 provides an interesting case. When compared with the scholarship of his teachers' generation, which was marked by a high degree of secrecy, Dōzō, who lived in the late middle ages, made his knowledge publicly available through lectures on Chinese texts and so on, but he established stages for the study of his own works, and texts of the highest level in particular were strictly controlled and preserved a mode of transmission of scholarship that went back to the age of manuscripts.

During the time of Gensaku, printing with wooden type made possible the printing of lecture texts, but the printed text was unstable, and it was revised as the lectures were repeated, with readings and annotations being added. This paved the way for stable texts and interpretations in the subsequent period of wood-block printing. Among Dōzō's own works, elementary and intermediate-level texts were printed from an early stage with wooden type and later with wood-blocks, but texts for the highest level are thought to have continued to circulate for quite a long time as secretly transmitted works in the form of manuscripts.

As a result of the growth of wood-block printing, Chinese works with reading marks were circulating by the middle of the early modern period and their readership was growing. But an education system under the direct supervision of the *bakuhau* 幕藩 system had not yet developed, and private schools in Kyoto, the centre of scholarship, attracted students from all around the country, including many physicians' sons, and there was close exchange between Confucianists and physicians. In the second half of the eighteenth century local schools were established in the provinces, and there was an increasing shift from Buddhism to Confucianism in the norms of daily life. Eclecticism was accepted as a means of surmounting the conflict between Song-Ming studies and the school of ancient learning, and this opened the way to “Chinese-Dutch eclecticism.”

As domainal schools gradually increased nationally around 1800, the medical school (Igakukan 医学館) in Edo 江戸 was placed under the direct supervision of the shogunate, and physicians were trained and selected there. Importance was attached to medical classics, as this reflected the scholarly approach of the Taki 多紀 family, in charge of teaching at the medical school, and of the Confucianists who assisted them, and it also accorded with the objectives of a government medical school, which aimed at the acquisition of safe and sure scholarship. Whereas studies not sanctioned by the shogunate were prohibited at its official academy (Shōheizaka Gakumonjo 昌平坂学問所), schools of learning not sanctioned by the government continued to have a place in the medical school. Selection examinations linking appointment to office with examination results were held, and books written by members of past generations of the Taki family became textbooks used as medical classics. In addition, lectures were divided into ordinary lectures attended by the sons of physicians and advanced lectures attended by medical practitioners from domains and cities who had studied at private schools run by members of the Taki family. After the medical school was placed under direct shogunal control there was a loss of flexibility over personnel, and as conflict with Western learning, which was growing in popularity, intensified, the broad-mindedness of the earlier period prior to the imposition of direct shogunal control was gradually lost.